

地域包括ケアを支える医療と福祉人材の養成に関する取り組み（その1）

－「長崎多職種連携・たまごの会」の形成・発展過程における教育の実際と学びに焦点を当てて－

○ 長崎純心大学医療・福祉連携センター 吉田 麻衣 (8774)

潮谷 有二 (長崎純心大学医療・福祉連携センター・2675), 永田 康浩 (長崎大学大学院医歯薬学総合研究科地域包括ケア教育センター・9050), 奥村あすか (長崎純心大学医療・福祉連携センター・8773), 宮野 澄男 (同・8744)

キーワード：地域包括ケア，福祉人材養成，多職種連携教育

1. 研究目的

団塊の世代が75歳以上になる平成37(2025)年を見据え、できる限り住み慣れた地域で、人生の最期まで尊厳をもって自分らしい生活を送ることができる社会の実現に向けて、住まい・医療・介護・予防・生活支援が一体的に提供される地域包括ケアシステムの構築を実現することが求められている。また、潮谷(2015)は、地域包括ケアシステムの構築にあたって行政分野、医療分野、福祉分野といった、いわゆる専門職間の連携にとどまることなく、地域住民との有機的な連携システムを確立する必要があること、そして、このためには、多様な地域特性を踏まえて地域住民が有する医療・福祉ニーズを的確に把握し、適切に対応することができる地域包括ケアを担う人材を養成・確保することが急務になっていると指摘している。

このような状況の中、長崎純心大学医療・福祉連携センターは、平成25年度文部科学省「未来医療研究人材養成拠点形成事業【テーマB】リサーチマインドを持った総合診療医の養成」において、長崎大学大学院医歯薬学総合研究科地域包括ケア教育センターと連携して「つなぐ医療を育む先導的教育研究拠点の構築—人と人、場と場、ケアとリサーチをつなぐ総合診療医の養成—」プロジェクトを実施するために平成25年10月1日に設立された教育研究組織である。このため、当該事業の実施にあたっては、地域包括ケアを支える医療、福祉専門職の人材養成に資する教育システムを構築するために様々なプロジェクト(以下、教育プロジェクトという.)を行っており、それらについては、長崎大学医学部医学科や長崎純心大学人文学部現代福祉学科等の学生たちが参加してきている。そして、その過程に参加した一部の学生たちが「長崎多職種連携・たまごの会(以下、たまごの会という.)」という勉強会のサークルを設立した。

本報告では、長崎大学と長崎純心大学の連携事業(以下、本事業という.)の教育プロジェクトに両大学の学生が参加し、たまごの会が形成・発展していく過程に関する教育内容や学生の感想文等の基礎資料の収集及び整理をし、学生の学びや気づきを明らかにし、多職種連携教育の一助に資することを目的とした。

2. 研究の視点および方法

研究方法は、平成26年4月9日から平成28年4月2日の間に、学生が参加した本事業の教育プロジェクトにおける配布資料、音声や動画、写真、教育プロジェクトに参加した学生の感想文や学生が作成した発表資料等の資料収集を行い、教員の対応やその時に学生への刺激となった出来事なども踏まえて、整理していくこととした。

研究対象は、本事業の教育プロジェクトに参加した長崎大学医学部医学科及び長崎純心

大学人文学部現代福祉学科の学生の中でも、たまごの会のメンバー並びにたまごの会の形成に関わった学生とした。なお、感想文については主に、長崎純心大学の学生を対象としていることをお断りしておく。

3. 倫理的配慮

倫理的配慮として、日本社会福祉学会研究倫理指針を踏まえ、本研究に関わった個人や団体等の匿名性を守るために、自由記述の文章については、マスキングを行った。

4. 研究結果（紙幅の関係上、結果の一部についてのみ記載する）

資料収集と整理の結果、対象となった学生が参加した本事業の教育プロジェクトは、NICE キャンパス長崎、地域医療セミナーin GOTO（以下、五島セミナーという。）、秋田大学医学部主催のシンポジウム、医療と福祉の専門職を目指す学生たちのフォーラム、九州地域医療教育研究会等が存在することが明らかとなった。また、教育プロジェクトに参加した学生の感想については、例えば、平成27年に行われた五島セミナーに関するものとして、「他分野の学生と意見交換を行い、視点の違いを実感した」、「多職種連携を実現していくためには、他の職種の意見や考え方を受け入れること、そのうえで自分の職種についてもしっかりと説明することが出来る力が必要である」、「自分の福祉の知識が足りないということを感じ、今後は、さらに福祉のことについて学び続ける必要があると気づいた」等といった言葉がみられたことから、これらを本事業の教育プロジェクトによる主たる効果として解釈した。さらに、本事業における教育プロジェクトの副次的効果としては、たまごの会が形成され、学生が主体的・能動的に学習する（アクティブ・ラーニング）姿勢を育むことができたのではないかと推察することができた。加えて、たまごの会のメンバーが、他大学の学生と交流し、他大学の学生が主催する勉強会へ主体的に参加することによって、他大学の学生と刺激を与え合う関係形成がなされているという波及効果が生じていることが明らかとなった。加えて、教育プロジェクトのプロセスにおける教員の対応としては、学生引率、学生が研修会やシンポジウム等に参加・発表する機会（時間）及び場の確保・提供、長崎大学との調整、発表前の検討・フィードバック、セミナー等への参加のための資金の確保、学生の主体性の尊重等が存在していたことが明らかになった。

5. 考察

本報告において、本事業の教育プロジェクトによって「他分野との視点の違いを実感した」等の多職種連携教育の主たる効果とたまごの会が形成され、アクティブ・ラーニングにつながったという副次的な効果を得られたことが大きな成果の一つであると考えられた。

今後の研究課題としては、今回収集し、整理した資料等をもとに、学生の学び・感想と教育内容や出来事との関連を検討し、将来を担う多職種人材養成教育にあたり、どのような教育内容が必要であるか考察していくことがあげられる。

※本報告における詳細な結果については当日配布予定である。

※本報告は、文部科学省の「平成25年度 未来医療研究人材養成拠点形成事業【テーマB】リサーチマインドを持った総合診療医の養成」に係る研究成果の一部である。